蘇る大地

恵水謝恩

―四ダムが暮らしを支える栗原の里―

清水建設株式会社　顧問　宮森　俊光

はじめに

蘇る台地、今回の素材は、宮城県栗原市（旧一迫町）に位置する「小田（こだ）ダム」である。農林水産省の直轄かんがい排水事業「迫川上流地区」の主要工事として平成十七年に完成したゾーン型ロックフィルダム（ＦＡ）だ。堤高四三・五ｍ、堤長五二〇・〇ｍ、有効貯水量九、〇一〇千㎥、施工は清水建設、奥村組、鴻池組の特定ＪＶが行った。

小田ダムは、一級河川北上川水系迫川の支流長崎川を開発したものだが、迫川には本川（迫川）とは別に、二迫川、三迫川という支流がある。そして、それぞれの支流の最上流には四つのダムが建設されており（小田ダムが最後の四番目に完成）、最も古くに完成した花山ダム地点（迫川）に宮城県が栗原地方ダム総合事務所を設けて四ダムの管理にあたっている。

宮城・秋田・岩手の三県にまたがる標高一、六二六ｍの栗駒山から南東方向に拓ける迫川上流地区の受益地は、栗原市を中心に、隣接する登米市、岩手県一関市にも広がる面積一万haの優良田園地帯である。「ひとめぼれ」と「ササニシキ」の産地として有名であるが、最近では、冷めても甘い「だて正夢」や玄米食用の「金のいぶき」の評判も上々のようである。

この栗原の里に、なぜ四つのダムが必要となったのか。四つの支流で開発された農業用水が、どのように一万haの農地に配られているのか。人々の暮らしの今はどうなっているのか。現地取材を交えてレポートする。

迫川上流域と４ダム（出典：宮城県HP）

※【ＦＮＡＷＩＰ】ダムの利用目的。順に、洪水調節、不特定、農業、水道、工業、発電。

全総の一期生「北上特定地域総合開発計画」

東北本線の西側に位置する迫川上流地区から、線路を跨いで迫川を南へ下ると、登米市から石巻市に入るあたりで迫川、北上川、江合川の三川が合流する。この間の迫川中・下流域は、古来から頻繁に洪水被害に見舞われてきた湿潤氾濫の地である。このため、藩政時代には、北上川と迫川の分離工事や、舟運開発と流況安定のための北上・迫・江合川の連絡工事などが実施されてきた。明治二十九年に河川法が制定され、重要河川の治水

対策に重点が置かれた後には、「新」北上川と「新」迫川の開削や伊豆沼・長沼の開発も進められた。今日「旧北上川」、「旧迫川」と呼ばれる区間があるのはこうした経緯からである。

一方、迫川上流域については、比較的洪水被害も少なく、農業用水も藩政時代に整備された施設でどうにか賄うことが出来ていたので、近代的な開発が中々なされなかった。

開発が本格化する契機となったのは、昭和二十二・二十三年と連続したカスリーン・アイオン台風の襲来である。迫川上流域にも未曽有の洪水被害をもたらした。昭和二十五年、国土総合開発法が制定されると、速やかに「北上特定地域総合開発計画」が策定され、迫川に花山ダム（昭和三十三年完成、ＦＮＷＰ）、三迫川に栗駒ダム（昭和三十七年完成、ＦＡＰ）が宮城県により建設されるに至った。

迫川の中下流域と北上川、江合川
（出典：北上川下流河川事務所HP）

しかし、二ダムによる水資源開発後も、農業水利の観点では、もとより河川の自流が乏しいため（小田ダム計画基準年昭和四十二年の年間降水量一、二〇五㎜）、排水路を堰上げて再利用しつつも厳しい「番水」が継続していた。さらに、伊達藩時代に作られた小規模分散型の水利施設の老朽化や維持管理の労力・費用の増大といった問題も顕在化してきた。河川からの取水施設は一一〇か所以上に及び用水系統も複雑を極めていたのであった。

※【番水】少ない水を平等に分け合うため、順番（日にち、時間など）を決めて水田に水を入れていく水利用のルール。

広域的な水利システム「国営迫川上流地区」

こうした問題に対処するため、主に支流単位で調査されてきた宮城県の成果を引き継いで、昭和四十六年から国が広域的な調査を行い、昭和五十一年に「国営迫川上流農業水利事業」が着工の運びとなった。土地改良事業の申請は、受益農家の代表が行うのが通常の手続きであるが、本地区は全国でも珍しい市町村申請事業である。市町村が「水利地益税」を賦課徴収して水利施設を管理してきた特殊事情があったからである。土地改良区主体の管理体制への移行も将来の大きな課題であったろう。

表は、土地改良事業で造成した施設と施設の管

土地改良事業で造成された主要な水利施設と施設管理者の変遷

取水河川	水源	国営事業（S51 ～ H17）		附帯県営事業（S58 ～ H22）		現在の施設管理者
		主な取水施設	施設管理者	主な取水施設	施設管理者	
	ダム管理者は宮城県	（HW：頭首工）	H７設立	（PS：揚水機場）	県営事業採択順にS59 ～ 62の間に設立	H21設立
三迫川	栗駒ダム	軽辺HW、板倉HW	迫川上流土地改良区連合	上田HW、岩淵HW	三迫川沿岸土地改良区 石越町土地改良区（一期3,830ha）	迫川上流土地改良区 ※栗原市は、平成17年、築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波姫町、花山村の10町村が合併して誕生
二迫川	荒砥沢ダム	一の堰HW		柳原HW、柳原PS	二迫川沿岸土地改良区（四期961ha）	
	伊豆沼			畑岡PS	若柳川南土地改良区（二期1,109ha）	
迫川	花山ダム	伊豆野HW、新山PS 石越PS		四ヶ村HW、秋山HW 川口PS、台場PS	一迫川沿岸土地改良区（三期3,060ha）	
長崎川	小田ダム	川台HW		西風HW		

理者である土地改良区の変遷を水系別に整理したものである（用水系統図をもとに大まかに分類した）。広域的な水利用を可能とする農業水利施設の新設・改修・統廃合と歩調を合わせる形で、徐々に水利用者主体の管理体制に移行してきた経緯が分かる。

小田ダムの全景（出典：東北農政局HP）

国営事業が完成したのは平成十七年、事業工期三〇年をかけた大規模な地域総合開発であった。本事業により、宮城県がダム事業者として先行開発していた花山、栗駒の二ダムに、東北農政局が事業者となった荒砥沢ダム（二迫川、FA、平成十年完成、施工：鹿島建設、大林組、西松建設）と小田ダム（FA、平成十七年完成）が加わったのである。

ダム以外の主要工事は、頭首工四か所、揚水機場二か所、幹線用水路五六km である。加えて、荒砥沢ダムに六三mの有効落差を利用した小水力発電施設を整備するとともに、平成十三年改正土地改良法に「環境との調和に配慮」する原則規定が設けられたことを受け、十七年三月開始の小田ダムの試験湛水に先んじて環境影響調査及び環境影響予測の評価を行っている。その上で、消失が予測される動植物の生息域として沼地を創出したり、リンドウ・サクラスミレの移植などの環境保全対策も講じている。一六四六年と伝えられる伊豆野堰の開削に始まり連綿と続いてきた農業水利事業のまさに集大成といえる迫川上流地区は、新しい時代の要請にも応える形で実施されたと言える。

一方、一万haの農地を対象とする農業水利の再構築は、基幹的な施設のみを整備する国営事業だけでは完結しない。残る末端の施設群については、宮城県が国営附帯関連事業として、迫川上流地区、迫川上流二期地区、迫川上流三期地区、迫川上流四期地区と支流単位の括りで県営事業を推進した。新しい広域的な農業水利システムが、川上から川下まで通しで完成したのは平成二十二年のことである。

国土総合開発法に基づく地域指定の一期生として河川総合開発に着手した迫川上流地区は、以来六〇年の歳月をかけて治水と利水の近代化を実現

小田ダムの洪水吐と堤体右岸部下流側

した訳である。この間の多くの関係者のご努力の積み重ねに敬意を表したい。

水利用の今「迫川上流土地改良区」

現地に赴いた際に土地改良区にお邪魔した。「迫川上流土地改良区」は、平成七年に国営造成施設を管理するために発足した「迫川上流土地改良区連合」を母体として、平成二十一年、支流単位で管理を行っていた五土地改良区を合併して出来た宮城県最大の土地改良区である。金野勤理事長、千葉正明参事からお話を伺った。

小田ダムが出来て「番水」は無くなったそうである。改良区の組合員の中でも、四〇歳より若い世代の農家は、もう「番水」という言葉にピンと来ないかも知れないと仰る。四ダムによる水資源開発によって、それまで極端に供給主導だった農業水利が、需要量を満足するシステムに転換したのである。

他方、もう「需要」サイドに不自由は無いのですかと伺うと、一万haの水田農業の事情はそんなに単純ではないようだ。

迫川上流地区の用水計画では、ピーク用水量の時期を代かき期（五月上～下旬）に設定しているが、今日では、中干後の八月中旬の用水ピークが大きくなっているそうだ。河川流量の少ない時期に、短期間に用水需要が集中するのが中干し後の特徴である。農家さんの中には、〝水不足感〟というか〝不便〟を感じている方もあるそうだ。農業の他に仕事を持つ方は、水田の取入口の開け閉めが、どうしても朝夕二回になるという。需要者サイドの水利用時間が狭まり、結果として地区全体の用水ピークが高まるという傾向は他地区でも指摘されている。個々の農業経営の省力化と合理的な広域水管理をどのように両立するかは、これからの農業水利の重要な課題と言える。

近年需要パターンが変化した要因として、千葉参事は、①作付け品種の多様化、②機械の大型化、③兼業農家の増大を指摘する。用水計画では、基準年における河川流況曲線と営農計画を基に積み上げた水需要曲線から、ダム開発水量と期別の農業水利権水量を算定しているが、近年の気候変動、農地の転用、農業構造の変化等の影響が急激に「需要」に作用するときに、現行水利システムによる「供給」が、どこまで弾力的に対応出来うるものなのか。非常に複雑な問題であろうが、一歩前進するためには、水利用の実態を正確にモニターすることが不可欠な作業であろう。

迫川上流土地改良区の職員の皆さんは、現在、ほ場整備事業の推進に日々忙しくされているそうだ。六地区の農業競争力強化農地整備事業が実施中である。六地区の受益面積を足し合わせると九〇六ha。土地改良区全体の受益面積の約一割で面整備が進められていることになる。地域総合開発の最後の仕上げ作業が今も営々と続けられていることに驚かされる。平成二十年六月十四日に発生した「岩手・宮城内陸地震」で荒砥沢ダム貯水池上流部が大規模に崩落する災害に見舞われるなどの苦難も乗り越え、東北人の底力と情熱は今も衰えない。

栗原市「定住戦略室」

今回、現地取材の段取りを練ろうと、小田ダムが位置する栗原市のＨＰを見ながら勘を養っていたところ、「住みたい田舎ベストランキング東北エリア一位！」の見出しに目が留まった。なんでも、地方への移住をテーマにした雑誌「田舎くらしの本」（宝島社）が毎年一回実施している「住みたい田舎ベストランキング」の二〇二一年版において、栗原市が東北エリア総合部門の第一位にランクインしたとか。これで五年連続ベスト三を獲得したことになるそうだ。

「（失礼ながら）んっ？」と感じて読み進むと、このランキングは、ダイナミックな観光名所の有無ではなく、「日々の暮らしの中で、自然の恵みを享受しやすいまち」という観点を重視したものらしい。さらに栗原市は、一八歳までの医療費無料化などの子育て支援や若者世代を対象とした住居の支援、就学・就農支援などに随分と力を入れていることも分かってきた。

特に「移住」は栗原市政の重点分野のようで、@東京、@仙台、オンラインと各種の移住相談会を展開しつつ、一六組の「移住定住コンシェルジュ」と一四名の「地域おこし協力隊」の皆さんの協力を得て、移住希望者あるいは実際に移住された方々の心配事・悩み事をサポートするといったきめ細かい枠組みを設けている。

関心を持った私は、（若干気が引けたものの）

移住相談者用の市役所のアドレスにメールを送り、市の方に現地取材の相談に乗ってもらおうとした。唐突なメールにも拘わらず、栗原市企画課「定住戦略室」の小関さんには非常に丁寧に対応して頂いた。人を招き入れる仕事に携わっていらっしゃるせいか、電話でもオープンでインクルーシブな空気が良く伝わってくる。

お陰で、一名のコンシェルジュの方と二名の地域おこし協力隊の方にお会いする段取りを整えることが出来た。

※【地域おこし協力隊】地方自治体が、都市からの移住者を「地域おこし協力隊」として任命し、農林水産業への従事、地域の魅力PR、お祭りやイベントの運営などの地域協力活動を行いながらその地域への定着を図る総務省の施策。

「小さな拠点づくり」の現場

「小さな拠点づくり」は、過疎化・高齢化が進行する農村部の活性化施策を考える際に自分自身良く使った行政用語である。要は、過疎地において住居が薄く広く分散しているため稼働率や採算性が脆弱になった生活サービス機能を、中核となる集落に集積することで全体のサービス水準を維持しようとする取組である。政策検討が始まったばかりの私の現役の頃は、ポンチ絵を描きながら机上で議論していたものだが、はて実際の現場はどうなっているのか。国土交通省「小さな拠点」づくりモニター調査地域に選定されたことが切っ掛けで平成三十年に発足した「（一社）花山ネットワーク」の事務局長の佐々木徳吉さん（移住定住コンシェルジュ）と、東京の大学院で建築を専攻した後、特に昔の長屋門の研究フィールドを求めて栗原市に移住していた地域おこし協力隊の海山裕太さんにお話を伺った。

花山地区は、昭和三十三年に宮城県施工ダム第一号として完成した花山ダム貯水池（花山湖）に隣接する人口が九百程度の小さな山村である。ダム建設で一六八戸が水没、半数は移住したこともあり、人口はダム建設前の四千五百から大きく減少した。過疎が進む中で定住環境を維持するための公的サービスを提供することが花山ネットワークの役割である。

空き家片付け隊

具体的な活動は、乗合デマンドによるバス運行、移動販売車による買い物支援、空き家の片付けと利活用、移住体験住宅の清掃・点検、「湖畔のみせ旬彩」の運営などである。運転免許自主返納制度が出来て交通弱者が増えたこと、社会福祉協議会、警察、区長らが頻繁に独り住まいの老人宅に顔を出すので、見守り活動自体は意外に飽和状態であること、農家のみならず商店の後継者問題も切実であることなど現場ならではのお話を伺うことが出来た。

現在、花山地区には、市役所の出先支所、診療所、幼稚園、老人ホーム、駐在所、ガソリンスタンドといった生活基盤が集積している。半径三〇〇ｍの範囲にこれだけの機能が集積している山村は珍しいと国交省の担当者が驚いていたという。さらに、花山湖には登米市、栗原市から秋田県湯沢市に抜ける国道三九八号が通っていること、平成七年に「道の駅　路田里はなやま（愛称：自然薯の館）」が開駅したことなど、本地区は「小さな拠点」としての条件は良く整っているようにも見える。

花山湖畔を車で移動する車窓から、栗原市立花山小学校の校門が見えた。佐々木さんに聞いてみると現在の全校児童は僅か一〇名とのこと。でも湖のほとりの小学校なんてお洒落ですねと言いかけたが、いや、小学校を含む全ての公共施設は、花山ダム建設に伴う水没補償で移転したことを教

わる。いまでこそ「小さな拠点」として今日的な役割を模索しているが、花山地区の激変は、実はダム建設に端を発していた訳だ。下流の治水・利水のために苦渋の選択を余儀なくされた上流の水没地は、今もって〝宿命〟のような課題と向き合い続けている。

佐々木さんは、市町村合併前の花山村役場職員OBである。役場を退職した今も、小さな拠点づくり活動に奔走している。そして、彼の活動に関心を持った東京出身の海山さんが地域おこし協力隊として実務を支えている。ネットワークの皆さんは、空き家や耕作放棄地を「地域の余白」と呼び、多様な方と交わる、あるいは受け入れるための受け皿として活用可能な〝地域資源〟として捉えているという。何とか再生・利用できないものかと試行錯誤を繰り返している。今年オープンした湖畔のカフェは儲かりますかねと伺うと、家に引きこもりがちなご老人達に、たまには湖を見ながらコーヒーでも飲んで欲しいからやっていると大らかにかぶりを振られた。稼働率や採算性という（都市的）価値観とは異なる（山村ならではの）暮らしの物差しをお持ちのようである。

土木の技術屋としては、ふと「作りっぱなし」という言葉が頭をよぎった。どのような形であれ、地域の今に関心を持ち、地域との関わりを維持する努力を惜しんではなるまい。そして「余白」にこそ目を向けるセンスを忘れないように。

花山ネットワークさんは、今年度の第九回「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」への応募を検討されているという。例年、受賞者を招いて総理大臣官邸で行われる交流会に、お二人が笑顔で参加されることを期待したい。

異色の「農泊」

一般的な「農泊」の説明は、農山漁村の方が、豊かな自然に囲まれた田舎らしい風情のある住居を活用して、宿泊サービスとともに、地元の食材、農作業体験、山菜採り体験などのコンテンツをパッケージングして都市から訪れた宿泊客に提供する農山漁村滞在型旅行である（従来の「農家民宿」と異なり、旅館業法等の規制が掛からず、より農家が取り組みやすい形となっている）。

伝統技術「正藍染」の１番刈りのお手伝い

その点、今回お伺いした地域おこし協力隊の櫻庭伸也さんの「農泊」は異色であった。二年前に岩手県花巻市から栗原市に移住するため、荒砥沢ダムから下流に車で一〇分の山村、文字地区に築六〇年の空き家を借りるところから始め、家屋の掃除・片付け・修繕、周辺の田畑、山林の再生・整備を自ら勉強・自ら施工で行いつつ、昨年四月に農泊「古民家櫻ノ庭」を開業した点である。「移住者による農泊」である。

住・職の場のセットアップ作業は今でも続いており、（逆転の発想とでもいうか）こうした作業を（いわばソフトオープン状態の）農泊の宿泊客に体験コンテンツとして提供しているそうだ。まぁ、実際には、火を使ったこともない最近の若者に機械や道具の使い方を手取り足取り教えながら、さりとて高額の交通費を負担して訪ねてくれた大学生からは実費程度の宿泊代しか頂けないのが今のところの実情のようではあるが。

地域おこし協力隊の活動としては、地元の伝統工芸品である「正藍染」や特産品である「苔」、「行者にんにく」、「原木キノコ」などの生産・販売活動をサポートしているそうだ。こうした活動を通じて、彼自身が地域社会に溶け込むプロセスを歩んでいるようだ。ゆくゆくは、大家さんの信頼を得て家の所有権を得たいと仰っていた。

「古民家櫻ノ庭」は、居間の薪ストーブこそ新式であるが、言ってみれば母屋と納屋からなる昔

の農家である。空き家が長かったのでお風呂などは自費で改修したそうだ。中途半端な気持ちでは取組めない。櫻庭さん自身が、自らのライフスタイルを実現する目的意識を持って移住してきたことは良く想像できる。

彼は、今の若者たちに「生きる力」を身に付けて欲しいと語る。都会では、お金と言う対価を払い、あらゆるサービスを他者に委ねて暮らしているが、そのことで、生きる力や喜びから無意識のまま遠ざかっている。「櫻ノ庭」での〝共同生活〟を通じて、若者たちの気付きに期待しているようだ。

自給自足を目指す、とも語る彼だが、地元の方の支えなくしては暮らしていけないことも十分に自覚されている。空き家を借りるにあたっても、大家さんと何度も面談したそうだ。大家さんにしてみると、いくら空き家にしているとは言え、ヘンテコな都会の人間を住まわせたとなると地元の方に申し訳ないという心理であろう。なので櫻庭さんは、地元の皆さんと一緒に取り組む活動を大切に丁寧に実践している。今では、草刈り機やトラクターを貸して頂けるようになったとか。文字の生活にさほどお金は掛かりませんと笑うが、案外この辺が、農村移住の向き不向きの分かれ目かも知れない。

東京でIT企業に勤めていた彼は、移住した今もWEBで、CSRやSDGs関連の副業を行っているそうだ。農山村とITは、それなりに相性が良いのであろうか、両方に中途半端な私には不思議に思えたりも、可能性を予感したりもする。実際のところ、コロナで対面授業の経験のない大学生が、櫻ノ庭滞在で知り合った仲間たちと、その後もzoomで繋がっていると言う。そして、そんなグループは、リピーターとして再度訪れて来るらしい。

農林水産省に勤務していた頃、農泊を、農村に都市のお金を循環させる道具、という文脈で考えることが多かった。疲弊する農村に必要なのは「雇用と所得」と言う訳だ。もちろん、前置きとして「近年の若者の農への回帰志向の高まりを踏まえ」とか能書きを垂れていたものだが、櫻庭さんのお話を伺うにつれ、新しいライフスタイルを提案するという農泊の大切な側面を改めて思い起こした。

迫川上流地区の水田開発と四つのダム

迫川上流土地改良区　金野　勤

迫川上流土地改良区は仙台平野の北端に位置し受益地は約一〇、〇〇〇haで栗原市のほぼ中央と登米市、一関市の一部を占めています。西側には秋田に接した栗駒山がそびえ東側は石巻まで平坦な地が続きます。沖積平野といわれる海底から出現した平坦な地に栗駒山麓から流れる三つの迫川が氾濫を繰り返しながら西から東に土砂を運び葦原となり、土砂を運びきれなかったところが渡り鳥の越冬で有名な伊豆沼として残ったと考えられます。

このため、低湿地が多く受益地最上流部の荒砥沢ダムや栗駒ダムの地区は標高六〇～二〇〇mで、比較的急傾斜地域な迫川上流地域と耕地の大部分は中流地域に属し、傾斜は緩く標高八mから四〇mが受益地の八〇%を占めております。高低差は少なく川はゆったりと流れ、鉄道開通以前は迫川が北上川水運の一端を担っておりました。迫川は最近まで何度も氾濫を繰り返し、昭和二十二年カスリーン台風、二十三年アイオン台風と二年連続して大規模な堤防の決壊があり甚大な被害を受けました。私の子供のころは雨量が五〇㎜にもなると南北に走る道路はいたるところで膝上まで冠水しました。それがなくなったのは昭和三十二年花山ダム、昭和三十六年栗駒ダムが完成した後からでした。

また広い山地流域を持つ迫川は雨が降ると一度に増水し渇水期には川底が露出するほどで昔から水争いが絶えませんでした。農業の機械化や基盤整備の進展に伴い、水がどうしても足りないという事から国営かんがい排水事業迫川上流一期・二期地区で荒砥沢ダム（平成十年完成）、三つのダムのすき間を埋める形で四番目の小田ダムが平成十七年に作られました。これにより迫川下流域との取水調整も対立なく行えるようになりました。小田ダムは他のダムに比べると貯水量が四割ほど小さく、低地にあり雪解け水の貯水量は劣りますが、農繁期の用水の調整役として重要な役割を担っています。又、人里にも近く周囲の一角にパークゴルフ場もあることから市民にも大変親しまれているダムです。迫川流域に住む私たちはこの四つのダムにより治水、利水の恩恵をこれからも受けてゆけるのです。

私たちの祖先は伊達二代藩主忠宗の時から何百年もかけてこの地を開拓し、その上に現在まで様々な努力を重ねてきました。今また過去を振りかえり、その意志を受け継ぎ、次の未来に向けて行動することがこの地に生活する私たちの責務であると考え皆様と一緒に努力してまいりますので、これからも皆様のご支援ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。終わりにこの様な機会を与えてくださった清水建設株式会社の宮森様と、拙い私の文章をお読みくださった皆様に深く感謝申し上げます。「ありがとうございました。」

おわりに

迫川から取水する伊豆野頭首工の下流右岸「伊豆野堰せせらぎ公園」に四地区の宮城県営事業の完工を記念した石碑がある。初代栗原市長佐藤勇氏の揮毫により「恵水謝恩」と記されている。

長らく洪水や渇水に悩まされてきた迫川上流地区であったが、国と県によるダム開発と農業水利施設の整備により、ようやく「水」に悩まされずに済むようになった。その完工式典で披露された記念碑の言葉である。水に翻弄されてきた歴史を振り返ってもなお、水に感謝する気持ちを後世に伝えることの意味合いに様々な思いがめぐる。

恵水謝恩

今回の取材を通じ、ダムや頭首工といった大規模な土木施設の役割と効果が確認できた。しかし、これとは別に、水を治め、水を利用し、様々な表情を持つ水と共存しながら、その「土地」で暮らしを続ける人間の営みの尊さ、気高さのようなものも強く印象に残るのであった。

最後になりますが、取材・執筆にご協力を頂いた皆さんに心から感謝申し上げます。

【参考文献等】
- 先人達の想いを、未来につなぐ　栗原の里（事業誌：東北農政局迫川上流農業水利事業所）
- 栗原の麓に抱かれた伊達藩の米どころ（地域の礎：農業農村整備情報総合センターHP）
- 土地改良区の概要（迫川上流土地改良区）

小田ダムの思い出

清水建設株式会社
四国支店副支店長
（元小田ダム特定JV現場代理人）
仁瓶　崇史

私が清水建設に入社してから三五年が経ちましたが、そのほとんどをダムの建設に携わって参りました。全部で六つのダム現場を経験させてもらいましたが、その中でも、土質材料を盛り立てて造成するロックフィルダムを初めて経験できたのは、兵庫県で施工した電力関係の揚水式発電所のダムでした。ちょうど入社してから二年目ということで、ロックフィルダムのスペシャリストである先輩方々から丁寧に施工の「いろは」を教わることができました。

品質管理を担当させて頂いた時は「土と会話をするんだ」と主任に言われ戸惑ったこともありました。それでも、だんだんと経験を積み重ねていくうちに、自分でも「土と会話ができるようになってきたかな」と感じることができ、ロックフィルダムの技術者として自信が持てるようになりました。それと同時に、自然の土石を盛立て、ダムの表面を巨石で敷きならべるロックフィルダムに魅力を感じるようにもなりました。

この現場の後は、しばらくダム現場から離れたり、コンクリートダムの現場に従事したりしましたが、ロックフィルダムの現場にもう一度従事したいという気持ちが沸き上がり、その願いが叶い東北農政局の小田ダムの現場に着任することができました。

小田ダム建設工事の工期は一九九四年二月から二〇〇六年三月までのおおよそ一二年間で、建設地は宮城県仙台市の北にある大崎市（当時は古川市）から、車で北西に三〇分ほど走った栗原市一迫というところでした。

私は一二年間の工期の内、一九九九年十月に着任し二〇〇六年三月の最後まで従事させて頂きましたが、その間、先の兵庫県のダムの経験を活かして色々な工種に携わらせて頂きました。

私が着任した一九九九年十月はちょうど基礎地盤検査を受検する時でしたが、その検査前日の晩に大雨が降り検査範囲が冠水してしまい、作業員や職員みんなで水替えをするという出来事がありました。着任早々慌ただしい出来事に出くわしてしまいましたが、その後は所長や先輩方々の指導、作業所の皆さんのチームワークで順調に進んだと記憶しています。

順調にと言ったものの、苦労したことはたくさんありました。盛立て材料は現場内の原石山を発破して採取したのですが、採取した岩石を迅速に用途別に選別する方法を得意先に納得してもらったこと。また、民家が近く騒音や振動を少しでも抑える工夫を発破業者と試行錯誤を繰り返しながら施工したこと。小田ダムの基礎地盤は非常に繊細で、少しの時間でも乾燥してもろくなってしまうので、短時間で次工程に進めるように施工方法や施工範囲・手順を工夫したこと。ダムの基盤に監査廊を構築することになっていましたが、工期を短縮するために、雨天時でも作業ができるようにスライド式の屋根を考案し、さらに鉄筋をユニット化して施工効率を上げる工夫をしたこと。

こうした苦労や過去の経験を活かし、さらに先輩方々の指導により、無事盛立てが完了し二〇〇六年に湛水試験を迎えることができたときは、小田ダムに従事出来て本当に幸せだったと感じました。また、工事期間中に、地元の方々と交流できたことによりその習慣や風土を理解できたことは、私にとって大きな糧になりました。迫川上流地区の農業の繁栄に少しでも関わることができたことに感謝しています。